

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート（第9号）

図書館と Web サイト

未来の図書館 研究所

樹村房（発売）

2026

Library and Website

The libraries of the future research, Inc. Annual Report (Vol.9)

The libraries of the future research, Inc.

Distributed by Jusonbo

Tokyo, 2026

はじめに

公共図書館は、地域の人々が学び、暮らし、社会と関わっていくために必要な知識・情報を収集・整理し提供してきた。学校の授業を理解・習得するため、社会や人間を知り考えるため、地域や世界の現状・歴史・文化を学ぶため、その他、より充実した豊かな人生を送るために必要な多種多様な知識や情報である。これらは、地域の人々が必要なときにいつでも容易に利用できるように用意されていなければならない。

2022年に改訂された「IFLA-UNESCO 公共図書館宣言」(以下「宣言」という。)は次のように述べている。

「それ(公共図書館)は知識社会の不可欠な構成要素であって、ユニバーサル・アクセスを実現し、すべての人に情報の意味のある利用を可能にするという責任を果たすため、情報伝達の新しい手法を継続的に取り入れる。」

ユニバーサル・アクセスとは、だれでも自由に情報を利用できるということだ。図書館はそのために「情報伝達の新しい手法」を絶えず追求する。今日の状況で人々に最も親しまれ利用されている情報伝達の手段は、言うまでもなくインターネットとその上で動作する Web 技術だろう。図書館は、この情報伝達手段を積極的に取り入れ、人々が容易に図書館の知識・情報を入手しそれを最大限に活用できるようにしなければならない。せっかく図書館に大量の有益な知識情報が集積されていてもそれを人々が自由に利用できなければ、使う人にとっては無

いも同然なのだから。

本書は、上記のような問題意識をベースに昨年（2025 年）11 月に開催されたシンポジウム「図書館と Web サイト」の記録を中心に編集されたものである。このシンポジウムでは、図書館の Web サイトが満足できる利用体験（ユーザーエクスペリエンス）を提供する情報センターとなるためには何が必要なのかを議論された。

まず、筑波大学図書館情報メディア系の池内淳氏からオンライン環境における情報利用行動についてお話を伺った。利用時間帯の違いや関心が集まる情報の違いなど、近年の人々の情報利用行動の変化、ネット上の情報利用行動の特徴、図書館の利用との違いなどである。年齢、性別など属性による利用する SNS の違いなどの話も印象深い。

次いで図書館の Web サイトを独自に開発・運用されている野田市立興風図書館の川嶋齊氏に野田市立図書館の事例を紹介していただいた。野田市立図書館では「発見がある」Web サイトをテーマに、県立図書館の蔵書を検索し予約をかけることができる仕組みや、資料を検索した結果の画面からカーリルその他の関連サイトへ飛ぶことのできるリンクなどを提供している。講演では、システムの仕組みやどのように構築・運用しているかも語られた。

本書では、これらの発表の記録及びその後に行われたディスカッションの記録を掲載している。

併せて、亜細亜大学経営学部データサイエンス学科の安形輝氏の論考「図書館ウェブサイトのユーザーエクスペリエンスの再定義」を掲載した。見やすさやレスポンス速度などの「狭義のユーザーエクスペリエンス」から区別された、時間的持続性、空間的・組織的な広がり、そして、それらを支える安全性と信頼性などを含む「広義のユーザーエクスペリエンス」に関する考察である。広義のユーザーエクスペリエンスは「サービス全体の品質」を指すものであり、それを向上させるための課題を論じている。

これらの発表及び論考は、これからの図書館の Web サイトをどう位置づけどう発展させるかを考えるうえで貴重な材料となるものである。

さらに本書には、社会福祉法人芳雄会図書顧問である伊藤明美氏による子どもの読書政策に関する論考「子育てを支える社会資源としての図書館の役割」を収めている。現在多くの自治体で「子どもの読書活動推進計画」の策定、更新が行われているが、その検討の基礎となる考え方を指し示すものである。子どもの読書環境に関わる多くの方々にぜひお目通しいただきたい一篇となっている。

2026年5月

未来の図書館 研究所
所長 戸田 あきら

目次

はじめに	3
■ 図書館と Web サイト	11
ユーザーエクスペリエンスを高める	
シンポジウムテーマの趣旨	戸田 あきら 13
1. 情報行動の変化	13
公共図書館 Web サイトの黎明期／2000 年代の Web サイトの開設状況及び内容／2010 年代～デジタル情 報提供の増加／図書館 Web サイトの役割の変化	
2. 図書館 Web サイトの今後	20
提供内容の今後の方向性・可能性／目指す図書館利用 体験（ユーザーエクスペリエンス）	
3. まとめ	24
講演「オンライン環境における図書館利用と Web サイト」	池内 淳 27
1. 情報行動の変化	28
電車内での行動率上位（2004～2013）／世代別電車内 での情報行動の上位 7 位（2017）／情報通信機器の世 帯保有率の推移／2013／2017 年出版界 10 大ニュース/ 紙の文庫市場の推移	
2. メディアの多様化	37
TikTok（#BookTok）	
3. Wikipedia の記事はいつ読まれているか	43
日本語 Wikipedia の時間別平均閲覧数の変化	
4. Wikipedia 閲覧数のスパイク（バースト）現象	50
婚姻による Wikipedia の閲覧数（50 万件以上）	
5. 予約件数の推移	53

6. 電子書籍はいつ読まれているか	57
電子書籍の利用は就寝前が最も多い／公共図書館 電子 書籍サービス導入図書館／NDC 分類ごとのコンテン ツ数の比率／出版社ごとの電子書籍数（上位 10 社）／ 電子書籍に占めるパブリックドメインコンテンツの比 率（日本）／電子書籍に占めるパブリックドメインコ ンテンツの比率（米国）／電子書籍数上位 20 の Project Gutenberg の状況（米国）／電子書籍サービスの名称	
7. 子どもの電子読書環境の現状	67
講演「野田市立図書館の事例」	69
川嶋 斉	
1. はじめに	69
野田市と野田市立図書館	
2. 野田市立図書館の Web サイト	73
野田市立図書館の Web サイトの仕組み／野田市立図書 館 Web サイトの目的／「発見」のために用意したもの	
3. 県立図書館所蔵の書誌の Web-OPAC 公開	77
「県立図書館所蔵の書誌の Web-OPAC 公開」の仕組み	
4. 在架なう！	81
在架なう！の仕組み	
5. web-OPAC+	86
web-OPAC+の仕組み／web-OPAC+でやっていること／ web-OPAC+でやっていること その他 1／web-OPAC+ でやっていること その他 2	
6. 野田市立図書館 Web サイトのこだわり	98
7. まとめと課題	102
ディスカッション	105
Web サイトの作成と人材／「web-OPAC+」と県立図書館 所蔵書誌の検索／SNS のチャンネルとオンラインの利用環 境／電子書籍サービス／Web サイトの利用分析／速さと快 適性／中高生の利用／まとめ	

■ 図書館ウェブサイトのユーザーエクスペリエンス	127
の再定義	安形 輝
序論：図書館ウェブサイトにおける UX の課題	127
第 1 章：UX の二つの定義	129
第 2 章：UX の時間的持続性	133
第 3 章：UX の空間的・組織的な広がり	136
第 4 章：UX を支える安全性と信頼性	139
結論：持続可能な図書館ウェブサイトの UX	143
■ 子育てを支える社会資源としての図書館の役割	151
—発達支援・家庭支援・社会支援の観点から—	
.....	伊藤 明美
1. はじめに	151
2. 変化する子育て環境	152
3. 子どもの読書政策と図書館	153
4. 子育てを支える社会資源としての図書館	154
5. 発達支援としての図書館サービス	155
6. 家庭支援としての図書館サービス	157
7. 社会支援としての図書館サービス	160
8. おわりに	164
あとながき	169
著者略歴	170

図書館と Web サイト

ユーザーエクスペリエンスを高める

開催日 2025 年 11 月 21 日（金）

会 場 出版クラブホール

会場および Zoom によるオンライン開催

講演者・パネリスト 池内 淳

川嶋 齊

コーディネーター 戸田 あきら

主 催 株式会社 未来の図書館 研究所

シンポジウムテーマの趣旨

戸田 あきら

本日はお忙しいなか、私どものシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。未来の図書館研究所のシンポジウムは、私どもが未来の図書館研究所を開設して以来、毎年開催しているものです。おかげさまで、今回 10 回目を迎えることができました。毎回多くの皆様にご参加いただき、特に、コロナ禍の後はオンライン開催も併用するようになりましたので、全国各地から参加いただいております。心から御礼を申し上げます。ありがとうございます。

シンポジウムでは、これからの図書館を考えていくうえで鍵となるような課題や考え方をテーマにし、図書館の今後を皆さんとともに考えていきたいという趣旨で内容を作っていました。今回もその流れのなかで、「図書館と Web サイト」というテーマを設定しております。ぜひ皆さんと一緒に議論し、これからの図書館について考えていきたいと思っております。

1. 情報行動の変化

公共図書館 Web サイトの黎明期

われわれが業務のなかで「Web サイト」を議論の対象とする

場合、図書館の Web サイト、いわゆる図書館のホームページのことを指す場合と、サービスのためのネットワーク情報源としての Web サイトを指す場合と、二通りあるわけですが、今回のテーマは図書館のホームページ、図書館の Web サイトです。図書館の Web サイトを私たちがどのようなものとして捉え、位置づけ、そして作り、活用していくのか、それについて考えようというのが、今回のテーマの趣旨です。今日ではほぼすべての図書館が自分の館の Web サイトをお持ちでいらっしゃるわけですが、ご承知のとおり、この図書館の Web サイトというのはそう長い歴史があるわけではありません。

公共図書館Webサイトの黎明期

- 1990年頃 World-Wide-Web開発・提案
- 1995年 Windows95 発売
- 1995年 神戸市立図書館Webサイト開設（日本の公共図書館で初と言われている。）
- 1996年11月 図書館雑誌「図書館とインターネット利用」を特集。
- 1997年 日本の図書館調査で「館外から所蔵資料検索ができる」と回答した公立図書館数 149館

図 1

日本の公共図書館で最初に Web サイトを構築したのは、神戸市立図書館といわれております。神戸市立図書館の年表を見

ますと、1995年9月27日のところに、「図書館情報ネットワークシステム稼動、図書館ホームページ開設」(<https://www.city.kobe.lg.jp/documents/571/jigyougaiyou.pdf>)とあります。これが1番最初だといわれておりますが、その後、徐々に公共図書館で Web サイトが作られるようになってきました。どのくらいのスピードで広がっていったのか、については、定かな数字があるわけではありません。1997年からしばらくの間、日本図書館協会(JLA)が『日本の図書館』の中の「コンピューター利用状況(公共)」調査で「館外から所蔵資料が検索できるか」という質問をしております。そして、その設問の最初の年である1997年に149館が「できる」と回答しています。どういう方法で提供したかは聞いていないのですが、おそらく Web サイトを通じてだろうと思われることから、この時点で少なくとも150館程度、あるいはそれ以上の図書館が、Webサイトを開設していたのだろうと推測できます。その後1990年代の終わりから2000年代に入って以降、続々と図書館の Web サイトが開設されます。

2000年代の Web サイトの開設状況及び内容

JLAは2003年から2009年までの間、隔年で公共図書館の Web サイトの開設状況とその内容の調査をしております。これによりますと、Webサイトの開設率は1番左側の集合棒グラフになりますが、Webサイトの開設率が、2003年の時点で60.7%、それが2009年には80.9%となっております。ですから、この2000年代の最初の10年間ぐらいの間で大部分の公

共図書館はWebサイトを持ったということがわかります。Webサイトの内容は、2番目の集合棒グラフ以降ですが、まず図書館の紹介や利用案内ですね。これが開設されているWebサイトにはほぼ100%掲載されている。続いて図書館だよりとか新着案内のような新しい情報を提供するというもの、これは85%から90%強掲載されています。それから目録が検索できるというもの。これが、2009年のあたりでは90%以上になっております。それから図書館資料の予約の受付ですね。これは2003年の時点では3割ぐらいですが、その後急増し2009年には73.8%と7割以上の館で可能となっております。

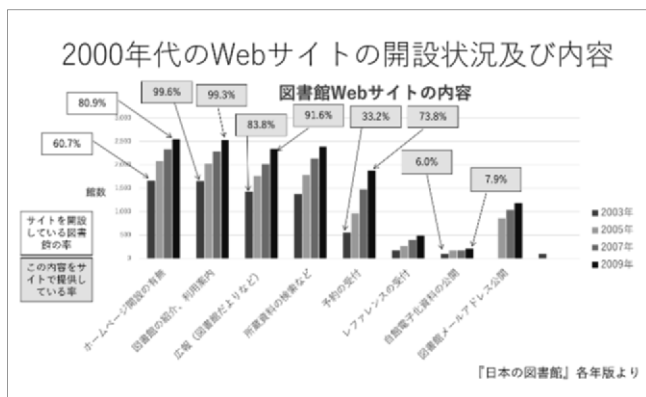


図 2

一方、自館電子化資料の公開ですね。これは右から2番目の集合棒グラフですが、6%から7%ぐらいと非常に少ない。「自

館で電子化した資料」を Web 上で公開しているかという質問なので、それ以外のデジタル情報については聞いておりませんが、実際のところ、デジタル情報の提供は、当時は館内での CD 等による提供を除いてはほとんど行われておらず、電子書籍やアーカイブなどはまだ始まっていませんでしたので、電子情報、デジタル情報を Web 上で公開する、提供するということは、この時代はほとんどやられていなかったということになります。

つまり、1990 年代の終わりから Web サイトは急速に図書館に広まってきましたが、2010 年ごろまでは、基本的にリアルな図書館、物理的な図書館を前提として、その図書館の利用促進であるとか、あるいはそこに所蔵されている紙の資料の利用、便利な利用のためのツールを提供するという範囲のものであったということです。

2010 年代～デジタル情報提供の増加

それがその後どうなったかと言いますと、2010 年以降ですが、JLA の調査は 2009 年までですので、それ以降の JLA のデータはありません。2010 年代になって電子出版制作・流通協議会（電流協）が類似の調査を行っています。JLA の調査は図書館単位だけ電流協の調査は自治体単位であるとか、あるいは図書館の Web ページでどういうサービスをしているかではなく図書館としてどういう電子図書館サービスをしているかという設問になっているなどの違いがあり、必ずしも連続させて見ることはできないのですが、ただこれらの電子図書館サ

ービスは多くは Web 上で提供されていることから、全体的な傾向はこの調査結果から見る事ができると思います。

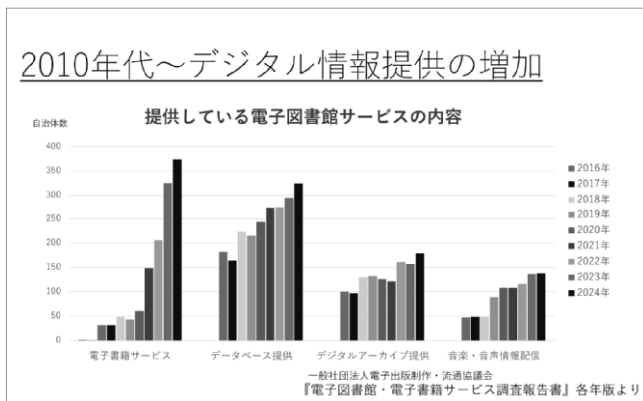


図 3

電流調査によりますと、まず、1 番左側の集合棒グラフですが、これは電子書籍サービスです。これは、コロナ禍を契機に非常に急激に上昇しています。この左側の縦軸の数値は自治体数で図書館の数ではありませんが、電流協の分析によると、2024 年の電子書籍サービスについては、図書館ベースだと 1682 館、50.9%の図書館が、今電子書籍サービスを提供しているとなっています。

次にデータベースの提供ですが、これも急激に伸びています。ただ、有料のデータベースについては、契約の関係で、Web で提供しているといっても基本的には図書館に来て図書館内の

パソコンで利用するという形になっていますので、Web で館外から利用できるわけではない。しかし、無料のデータベースもありますので増加していることは間違いないと思います。

それからデジタルアーカイブですね。これも着実に増加しています。それから音楽・音声情報配信、これについても確実に上昇しています。音楽・音声情報配信については、データベースと同じような契約上の問題があって、必ずしも図書館外からは利用できない、図書館に来ないと利用できないということはありませんが、増加してきているということは間違いないでしょう。

図書館 Web サイトの役割の変化

つまりこのように整理することができます。図書館の Web サイトは、開設している図書館数が 1990 年代終わりから 2000 年代初め頃に急激に増えました。2010 年ごろまではリアルな図書館の利用が前提で、リアルな図書館の利用をしてもらう、そこにある資料を利用してもらう、そのための補助的なツールというのがその役割だったわけですが、しかし、2010 年代以降は、もちろんその役割は引き続きあるのですが、それに加えて、デジタル情報を提供するプラットフォームとしての役割が強くなっていきました。内容的には電子書籍、デジタルアーカイブ、データベース、音楽配信など、それ以外にも、図書館の事業報告だとか経営計画など、統計データ等を含めて Web 上で提供する。いわば、情報サービスを提供するデジタル図書館となってきたと思います。

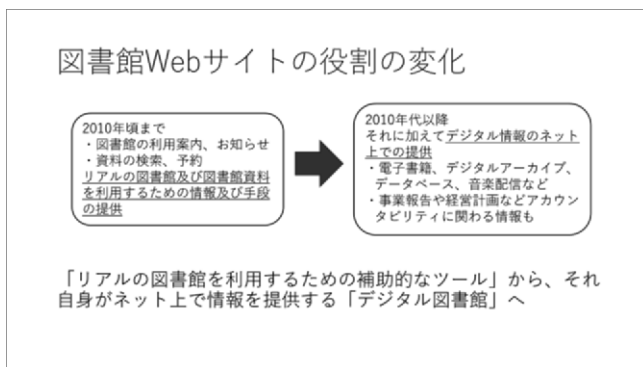


図 4

2. 図書館 Web サイトの今後

提供内容の今後の方向性・可能性

この方向性というのはおそらく、今後ますます強まっていくだろう。その中身としては、まず、デジタルの情報コンテンツの一層の充実があるだろう。世の中の情報自身がどんどんデジタル化されていますので、世の中のデジタル情報というのはますます多様に、大量になっていくだろうし、当然図書館から提供するデジタルな情報も、さまざまな種類のものが大量に提供されるようになるだろうと思います。

さらに、今はまだそう多くはないのですが、デジタルサービスです。デジタルによるサービスが、もっと Web 上で提供さ

れるようになるだろう。例えば、図書館の利用手続きがデジタル化される、あるいは利用に関する Q&A サービス、ヘルプサービスなどがデジタル化され Web 上で提供されるようになるだろう。それから、利用した結果に関連するネットワーク情報源や関連機関へのリンクの提供です。利用傾向、選好に応じた広告（関連情報）の提示はビジネスの世界では当たり前のことになっています。図書館も利用者が利用した資料や検索結果に関連する情報源であるとか、関連機関へのリンクが提供されるなどは当然考えられます。それから AI です。AI を活用して資料や情報の案内や相談をするというサービスはすでに始まっています。

さらに、リアルな図書館でも人と人をつなぐような、あるいは地域のつながりをつくるようなことが、今、意識して取り組まれているわけですが、これもネットワーク上で提供されるようになるだろう。例えば、みんなで本の感想を共有するようなシステムとか、そういうことですね。そういうさまざまなサービス、デジタルによって Web 上で提供されるサービスが増えていくだろう。

つまり図書館の Web サイトは、さまざまな情報がデジタルの形で提供され、また読書、知識、情報、地域に関連するいろいろなサービスが提供される非常に大規模で多機能なものになっていくだろう。リアルな図書館の広報媒体や補完的ツールというだけでなく、それ自体が一つのネット上に構築された情報サービス機関、デジタル図書館になるだろうし、すでにそうなりつつある。

ということは、われわれは片手間ではなくこの仕事にしっかりと立ち向かわなければならないということでしょう。今まで以上にこの図書館の Web サイトが使いやすい、わかりやすい、快適で有意義なものにしなければならない。そういうものでないと、利用者の期待に答えられないと思います。

提供内容の今後の方向性・可能性

- 情報コンテンツの一層の充実
 - デジタルサービスの開発・提供
 - 図書館利用手続き及び利用に関するQ&Aサービス
 - 利用結果に関連するインターネット情報源や関連機関へのリンクの提供
 - AIを活用した資料・情報の案内・相談
 - ソーシャルネットワーキング的なサービス（ex.感想を共有するシステム）など
- ⇒多様なコンテンツ・サービスを提供する大規模多機能Webサイトへ
※今まで以上に使いやすさ、わかりやすさ、快適さが求められる。

図 5

目指す図書館利用体験（ユーザーエクスペリエンス）

では、利用者にとどのようにして期待に応えるのか。コンテンツやサービスの充実、豊かさは前提ですが、それだけではなく Web 上のサービスとして利用体験、ユーザーエクスペリエンスを高めていく必要がある。私たちはどういう Web 図書館の利用体験を目指すのか。

まずは、求めているコンテンツやサービスに容易に到達できるということです。これは当たり前といえば当たり前ですが、

非常に難しいことです。いくらすばらしい機能が提供されていても、そこに到達し利用するには時間がかかったり手間がかかったり、いろいろ考えたりしなければならないようであれば利用されない、またそのサイトは評価されないでしょう。求めるコンテンツ、サービスに直感的な操作で何の苦労もなく到達できるようにするためには、さまざまなアイデアや技術が必要になると思います。しかし、まず、その点が重要です。

容易に到達できるということは第一に必要ですが、それは第一歩にすぎません。利用することによって期待以上の結果が得られるというような利用体験を追求したい。例えば問題解決のヒントになる情報を探していたら解決のための相談機関に連絡できたなどです。さらに、利用するなかで図書館に関する知識や利用スキルが向上するというのも目指していかねばならないと思います。

要するに、これはデジタル図書館であろうがリアルな図書館であろうが同じです。リアルの図書館において、われわれはこのようなことを目指してきました。利用者ができるだけ簡単に、容易にその求める資料や情報に到達できるようにする。それからその結果、思っていた以上の結果を得られるように努力する。それから、そのなかで図書館の使い方をわかってもらったり、その情報の見つけ方の知識を得てもらう、そういうことをリアルの図書館でも追求してきたわけで、それと同じことをネット上の Web 上の図書館でもわれわれは追求すべきだろう。

目指す図書館利用体験 (ユーザーエクスペリエンス)

目指すものはネット上の図書館もリアル図書館も同じ！

- ・求めているコンテンツ・サービスに容易に到達できる

「複雑な機器の場合、発見可能性と理解には、マニュアルか他の人から説明してもらうなどの助けが必要だ。(中略)簡単なものは不要でなければならない。」

「人は想像力が豊かで創造的であり、常識をたくさん持っている。しかし機械は(中略)この強みを利用せずに、我々が最も苦手とする、緻密で正確であることを要求する」

D.A.ノーマン『誰のためのデザイン?』増補・改訂版, 2015
- ・利用することで、期待していた以上の結果を得られる
- ・利用するなかで図書館に関する知識と利用スキルが向上する(成長する。)

図 6

3. まとめ

Web サイトは、もうリアルの図書館の付属物、補完物ではなく、それ自身が一つの Web 上の情報サービス機関となっています。今や図書館は、リアルの利用者に face to faceで向き合うリアルの図書館という前線と、Web 上のデジタル図書館という前線の二つのフロントラインを持っているというふうに考えるべきだろう。そして、そうであるならば、Web 上の図書館の利用者に快適な利用体験を提供するためには、Web 上の図書館に対する独自のポリシーとかデザインとか編集、また、そのための努力が必要だろう。

皆さん、「少年ジャンプ+」というサイトがあるのをご存じかと思います。『少年ジャンプ』は有名な少年漫画雑誌ですが、今それに対応する「少年ジャンプ+」という Web サイトがあって、これは単に『少年ジャンプ』の電子版を提供するだけではなくて、そこでさまざまな、新しい内容のある独自のコンテンツが提供されているということです。それは、今や日本の出版界では有数の漫画サイトになっている。そして、「少年ジャンプ+」には『少年ジャンプ』とは別の編集部がある。冊子の『少年ジャンプ』の編集部と「少年ジャンプ+」の編集部は別にあって、それぞれでそれぞれの媒体をどう発展させていくのかを考えている。それと同じようにはできませんが、図書館もその Web サイトに対して、リアルな図書館でわれわれが目指してきたような利用者の利用体験を実現するための独自の努力をしていかなければならないだろう。お金も、努力も積み重ねる必要があるだろうと思います。

図書館と Web サイト

- Webサイトは、それ自身一つのサービス機関
(図書館には行かずWebサイトだけで完結する利用は今後増えていこう。)
- 利用者に快適な利用体験を提供するために、リアルな図書館と重なり合いつつも、独自のポリシー、デザイン、編集が必要。またそのための努力が必要
- 図書館がこれからどのように図書館のWebサイトを認識し、構築・運営していくかは大きな課題

図 7

本日は、池内先生、それから川嶋さんのお話を伺って、これから図書館の Web サイトをどういうふうに認識し、どういうふうに捉え、それをどういうふうに作り活用していくかを考えていきたいと思います。

今回のシンポジウムのタイトルは「図書館と Web サイト」になっています。当初「図書館の Web サイト」というタイトルにしようかと思ったのですが、まずその図書館にとってこの Web サイトはどういう位置づけであり、どういうものを目指すのかということ、この時点で考えていったほうがいいだろうということで、こういうタイトルにしました。皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

では、これから講師の先生のお話を伺います。最初は池内先生のお話です。タイトルは「オンライン環境における図書館利用と Web サイト」です。池内先生は皆様ご存じのとおり、筑波大学図書館情報メディア系の准教授でいらっしゃいまして、図書館情報学、人文社会情報学等の研究をされております。文部科学省の有識者会議をはじめ、多くの図書館関係の協議会の委員もお務めでいらっしゃいます。

次に、川嶋齊さんに「野田市立図書館の事例」として、野田市の図書館における Web サイトづくりの取り組みや工夫についてお話を伺いたいと思います。川嶋さんは野田市立興風図書館の職員であり、また ICT を図書館活動に取り入れる実践的な活動をされているネットワーク、Code4Lib JAPAN のコアメンバーとして活躍されております。

あとがき

本書はちょうど第 10 回を数える未来の図書館研究所のシンポジウム「図書館と Web サイト —ユーザーエクスペリエンスを高める」の記録を中心に構成している。この 10 年で社会のさまざまなサービスがデジタルで提供されるようになり、デジタルシフトが進んでいる。

文部科学省が実施した 2024（令和 6）年度社会教育調査では、WebOPAC を 3400 館のうち 3020 館（89%）が実施し、付随した予約機能を 2826 館（83%）が運用している。実は、2015（平成 27）年度調査でも、その実施率はほぼ同じだった。つまり、この調査では 10 年の間、サービスの様態は図書館ではあまり変化していないようにみえる。

しかし、図書館における Web のあり方については、ディスカバリーサービスとしての OPAC 展開やオープンデータの登載、電子書籍サービスとの関連づけなど、検討すべきさまざまな問題がある。このあたりで改めてユーザーの立場に立ってその設計を考えてみる必要があるようだ。

池内氏と川嶋氏のお話、安形氏の「ユーザーエクスペリエンス」についての論考は、そうした現状を把握し問題に対応していくうえできわめて有益である。伊藤氏の「子育て支援」における図書館の役割も重要な課題だ。執筆者各氏に深く感謝し、今回も本書が樹村房のご尽力により読者にお届けできることに心よりお礼申し上げる。

未来の図書館 研究所
磯部 ゆき江

著者略歴

池内 淳（いけうち・あつし）

筑波大学図書館情報メディア系 准教授

研究分野は図書館情報学・人文社会情報学。図書館評価、公共図書館政策、情報メディアに関する研究活動を行う。茨城県立図書館協議会委員長、福岡県立図書館協議会委員長、文部科学省図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議委員

川嶋 斉（かわしま・ひとし）

野田市立興風図書館／Code4Lib JAPAN コアメンバー

1998年より野田市立図書館勤務。野田市立図書館では電算システムと郷土資料・古書の管理を担当、マンガの選書も行う。最近返却された本を紹介する「在架なう！」、JavaScriptを使ったWeb-OPACのカスタマイズ「web-OPAC+」、デジタルアーカイブ「電子資料室」を開発・提供。公共図書館における情報技術活用の促進に取り組む

安形 輝（あがた・てる）

亜細亜大学経営学部データサイエンス学科 教授

1998年に慶應義塾大学大学院文学研究科博士後期課程を単位取得退学。2021年より亜細亜大学図書館長。専門は図書館情報学。研究テーマとして、図書館サイトのアクセシビリティ、大規模書誌データ分析、ヴォイニッチ写本などの未解読文献、日本のマンガの国際的受容など。共著に『ヴォイニッチ写本 世界一有名な未解読文献にデータサイエンスが挑む』（講談社）、『スキルアップ!情報検索 新訂第3版』（日外アソシエーツ）

伊藤 明美 (いとう・あけみ)

千葉大学・白百合女子大学等 非常勤講師／社会福祉法人芳雄会 図書顧問・司書

立教大学大学院修了。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程院生。千葉県浦安市立中央図書館に司書として33年間勤務。研究テーマは、保育園の読書環境と公共図書館。国立青少年教育振興機構絵本専門士養成講座講師。主著『先生が本（おはなし）なんだね語りの入門と実践』（小澤昔ばなし研究所）、『絵本は親子のゆりかご』（NPO ブックスタート）、共著『児童サービス論』新訂版（日本図書館協会）など

戸田 あきら (とだ・あきら)

未来の図書館研究所

世田谷区立図書館、文教大学図書館を経て、未来の図書館研究所。共著に『公共図書館の自己評価入門（JLA 図書館実践シリーズ9）』『図書館サービス論（JLA 図書館情報学テキストシリーズII）』（日本図書館協会）など

図書館と Web サイト

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート（第9号）

ISSN 2433-2151

2026年6月11日 第1刷発行

編集 株式会社 未来の図書館 研究所

発行 株式会社 未来の図書館 研究所
113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2階
TEL 03-6673-7287 FAX 03-6772-4395
<https://www.miraitosyokan.jp/>

発売 株式会社 樹村房
112-0002 東京都文京区小石川 5-11-7
TEL 03-3868-7321 FAX 03-6801-5202
<https://www.jusonbo.co.jp/>

印刷 株式会社 丸井工文社

本書の無断転載を禁じます。

Printed in Japan

ISBN978-4-88367-425-1 C3300